

ミネソタ便り 8 (現地報告編 2)

やっと 3 月に入った。こちらでは暦のうえで 3 月 20 日が First Day of Spring である。

この国は、一年を几帳面に 4 等分し、6 月 21 日 First Day of Summer、9 月 22 日 First Day of Autumn、12 月 21 日 First Day of Winter と呼びカレンダーにも載っており、マスコミがこの日を話題にもするらしい。しかし、冬が長く夏の短いミネソタでは、すべて実感から 1 ヶ月以上前後にずれているという。

日本でも豆まき節分の翌日、寒い 2 月 4 日を立春といているから同じようなものだが中身が違う。

日本は、春一番で寒さの峠を越し、おひな祭り (桃の節句) で白酒 (甘酒) を飲み、春分の日前後のお彼岸で先祖を供養し、春を告げる行事とともに徐々に春を迎え入れ、少し寒いと「春は名だけの風の寒さよ」と心浮かれて歌にする。そして桜前線を追いながらお花見で春宴たけなわが北上する絵巻物である。

学校、会社、行事とほとんどのことが春に始まる。

いまさらながら思う。このように生活の舞台をつくってくれる日本の豊かな自然の恵みにもっと感謝しておくべきであったと。反省。ここは別世界である。

春一番をストレートに First Storm of Spring と言ったらよく通じた。ミネソタで春一番に当たるものは何か？ と尋ねたら 4 月の雨だとかえってきた。

ここでは、April shower brings May flowers と言って 4 月の雨を待ちこがれるようだ。

いまも少し雪が降っており、風もある。3 月だがどう見ても氷点下の真冬である。話をミネソタ Winter にもどそう。

信州の山小屋で長い間冬を毎年のように経験してきたので少しは冬に対する自信はあったのだが、当家の主 Mr. Marlyn Raymond (72) には寒さに対して無防備だと本気で怒られた。怒られながらいろいろな話を聞かされた。

Marlyn は 11 人の兄弟姉妹である。奥さんの Cecelia ニックネーム Sis は 9 人の兄弟姉妹である。Marlyn は、政治の話と堅い話が大嫌いである。Sis はインテリで子育て上手、料理の名人でもある。外交は Sis、内政は Marlyn の家族である。お二人は男 3 人、女 4 人のお子さんをこの地で育て上げ、みな所帯を持たせ孫も多い大家族である。すごいですねと持ち上げたら、世代が変わるごとに少なくなっており、いまは半分以下だと嘆いていた。

その Marlyn の兄弟姉妹がいまは 4 人だそうだ。7 人も失っている。詳しくはこちらからは聞けないのでどのような理由でなくなれたかは分からない。

その中で弟を失った時の話を二回、昨日のこのように聞かされた。二度聞かされたのは、私の英語の聞き取り能力を知ったのことだろう。40 年以上も経

っている話である。

その弟が結婚し、待望の子どもができ、奥さんがお産のため病院に入っていた。自宅に無事出産しそうだとの連絡が入ったので、喜び勇んで車でかなり離れた町の病院に駆けつけ喜び合った。

しかし、その後、思いも寄らぬ悲劇が待ち受けていたのである。その日は雪と風がある日であったが、車で行動できないほどではなかったようだ。ただひとつの確認を怠ったがため起きた悲劇であった。それは、燃料である。夜の帰路でガス欠を起こしてしまったのである。この辺の人たちは雪と風のある日は行動しないので一台の後続車もなかったようだし、今のように車が頻繁に走る時代ではなかった。ここでは、真冬の風雪日に人間が行動できるのは2マイルが限度だと言われており、弟は車から外へは出なかったようだが、不幸にして誰にも会わなかったのである。凍死してしまったそうである。

発見されたとき、車の中は寒さから身を守る必死の努力の跡があったそうだ。そのなかでもマッチ棒がぎりぎりまで燃やされ、きれいに並んでいたのは、わが子のために生きのびたかった思いが込められており、みな涙をさらに誘ったと言われている。弟は、日ごろ冷静で慎重といわれていたそうだ。ほんのちょっとしたことが命取りになる。気持や感情に左右されず、常に寒さへの備えを読みきる。これがこの地では必要なのであろう。

私は、ここに来てすぐこの家の鍵を持たされ、いつでも身につけておくようにと言われていた。私は、旅券（Passport）をいつも身に付けていたので一緒に持っていた。

ある朝、食卓に行って自分で朝食を用意し、食べながら、いつも置いてある新聞を捜したが見当たらなかった。そこで二重になっているドアをあけて外に出てポストから新聞を取ったまではよかったのだが、中に入ろうとしたがドアがロックされて開かない。しかもこのときに限って鍵は持っていなかったのである。

素手で帽子もかぶらず、コートも着ていないので急に冷えてきた。数分しか経っていないのに手や足が痛くなってきた。息をすると喉が同じように痛くなった。そういえば、喉を痛めるので外では喋るなとも言われていた。

急に恐怖感が全身を走った。あとは報告を省略させていただく。ただ醜い自分を見ただけだから。また、ミネソタのジョンウェン（主を私はこう呼んでいる）に怒られた。このとき聞かされたのが同じようなミスで発見が遅れ、一命はとりとめたが凍傷で目と鼻がつぶれ失明し、いまは修道院で暮らしているご婦人の話である。

冬は怖い。みなで協力しあい、必ず来る春を信じながらやり過ごす冬は、揉め事を起こしている暇はなさそうである。私には、大自然に挑んで生きている

人々の町には平和が維持されているようにも見える。犯罪の話は少ない。

Grand Forks 周辺を対象に発行されている当地の新聞 Herald 版 3 月 2 日付の The Second Front Section のトップに警察発表の記事として Safe city 報告が載っていた。

GF crime statistics comparisons 2003 and 2004

GF has no murders to report for the third year in a row, just one factor that police say makes it a safe community to live in. (以上見出しと前文の一部)

Arson3~21 ForcibleRape18~19 Burglary250~257 Murder0~0
Drug/narcotics 334~ 301 Robbery8~4. (以上表の写し) とあった。

長い冬から解放され、必ずまた来る冬を覚悟しながら迎えるミネソタの短い春夏秋をこの地の人はどうのように過ごすのであろうか。ではまた。